

仏教現場主義

第二十三回生 伊藤 康心

修行道場にいと疑問になった。答えられそうにない。仏教の祖に近いところで修行してみたい。お金はない。寺の受所で育英会のことを知り、とんとん拍子で、タイのワットパクナムに行くこととなった。

二月某日、日本の修行寺を下山した。それからタイの内乱が激化した。渡航はしばらくということになり、実家の厄介者が誕生したのだ。(ああ、無職。レ・ミゼラブルじゃあるまいし。)内乱の最中、兄の娘が誕生したり、パクナムの日本寺に行ったり、諸老師先輩、それまで世話になった僧侶を訪ねたりした。半年ほどしたある日、三日後に出発してください。となった。じえじえじえ。(驚きの表現)

バンコクに降り立つと、そこは熱い、仏教の王国であった。新たにテラワータ仏教という日本では小乗仏教、釈迦の仏教などといわれる教団に出家するため、僧侶の免許証を作ることとなった。父母兄弟、祖父母の名前、年齢まで記録され、タイ国の仏教庁に申請するのだ。正式

なタイのテラワダ僧となれば交通機関の優遇（バンコク市内のバス、水上バスの無料など）や、僧侶専門の病院は無料であった。（ああ、無料。レ・ミゼラブルじゃあるまいし。）今年は仏曆二千五百六十年、この教団システム（仏・法・僧への帰依）には、感心されつづけている。シーマ（結界）の中で、テラワダ僧の出家の儀式を行い、サンカティとチーボン（どちらも一枚の衣で畳み方が違う。日本僧の袈裟と大衣に該当）、腰まき、ベルト状のヒモ（パンツは履かない。）でのみの生活となる。ブーツ（台所用品のボールを網状の肩下げバッグのように包んだもの）という托鉢で使う用具、バケツ（水浴や洗濯に使用）に入った日用品セット（頭髪も剃っているのにシャンプーがあり、シェービングクリームの代用品だそうだ。）をたまたま寺にいたおばちゃん三人組が飛び込みで私に寄進していただくこととなった。私のタイでの初スポンサーである。（僧に布施や寄進することで徳を高めるといふ風習がある。）その後も会うたび、世話になった。クティ（僧の部屋）が決まり、隣人はオーストラリア、インドなど国際的であった。そばの啜り方を指導したり、仏教大学で一般人のおばちゃんとアビダルマの授業をとともに参加したこともあった。

また、タイでは成人となると男は一旦は僧になる通過儀礼があり、出入（でいり）激しく五十名ほどが同級生となった。短いのは三日坊主、普通で三ヵ月、長くて半年、一年いたのは三名。

二年で二人、一生やると宣言したのが一人だった。(今現在はどうか不明) 戒律のパーティモツカ(二百二十七条)を守ることは、仏教国タイでも、若者には酷なのであろう。

バクナムには六十歳から僧になったという四年先輩の平田さんがいた。(日本人テラワード僧は世界に二十名ほど当っていた。) 経営していた店、妻子をも捨て、文字どうり出家した行動する僧侶であった。私は寄生虫のように付いて回った。単独あるいは彼と供に体験したことを列挙してみたい。

チェンマイ近くのタモ寺(育英生の実生の落合さんが副住職をしている。)を訪問したこと。スコータイを外国人の仲間たちと行き、虫が浮くようなところで水浴びしたこと。カンチャナブリの川の中にある温泉に入ったこと。カベサコさんが住職していた寺で犬に噛まれ半年の間で注射六発受けたこと。ムカデに二回咬まれ、赤アリ(蚊よりも痒く治らない。)にも数知れずやられた。また、カエル、アリの卵、ワニなどの食材も堪能した。タイのエイズ寺といわれるところでは、患者のターミナルケアや、そこで亡られた方々がミイラに加工され、展示された博物館にも行った。死体が腐って骨と皮になっていくのを観察する修行がある。諸行無常の修行ということであろう。一般人では入れない、通れないところも見聞させていただいた。

行く先々で気付かされたのは、先の戦争での墓や慰霊碑の多さだ。カンチャナブリ、ゴール

デントライアングル周辺、ミャンマーの首都、観光地近くの山中など、お参りさせていただいた。帰国後、九段下に参拝した。各国の事情もあろうが、右だ左だ、宗派だ、何教だとかは抜きにして、すべての教えは、私利私欲ではない平和、平安を願う行っていくものだと思っている。（ああ、無常。レ・ミゼではなくブツダか。）

瞑想法など書かなかったこと、説明不足など多々ありますが、気軽に聞いてください。このような機会を与えてくださった善光寺育英会を始め、すべての皆様に感謝します。